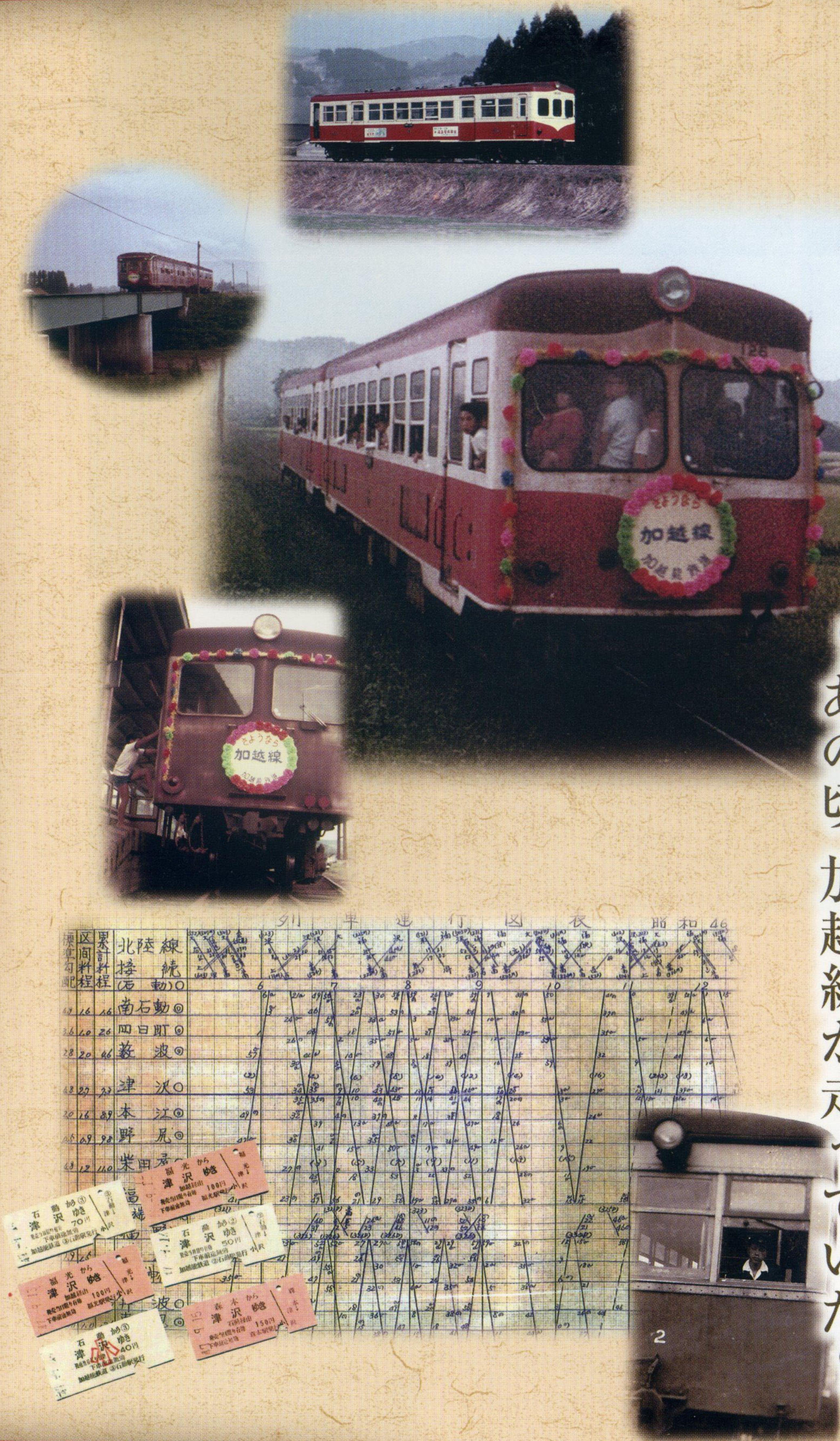


か 越 線 物 語

「あの頃 加越線が走っていた」



加越線の風景



『加越線 終末の記』より

●加越線とは？

昭和47年9月15日までの57年間、現在の小矢部市・南砺市・砺波市を走っていた鉄道です。石動駅南側から出発し、砺波平野の田園地帯を南下し、江戸時代に舟運で栄えた津沢を経由し、中越鉄道(現在のJR城端線)福野駅と接続していました。福野からはほぼ東へ向かって伸び、高瀬神社、井波を経由し、流木の集積地だった庄川を結ぶ、全長19.5kmの非電化路線でした。

大正4(1915)年7月21日、井波にある瑞泉寺の太子伝会にあわせて、福野・青島町間に開通し、7年後の大正11年に石動・福野間に開通しました。

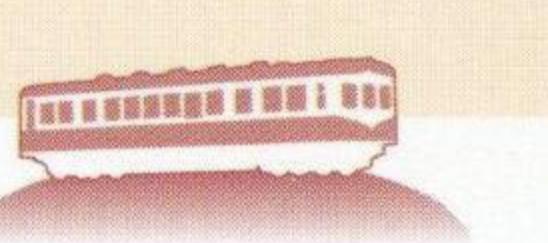
線路跡地は県道富山・庄川・小矢部自転車道線となっているほか、現在は代替バスが走り、当時の様子を今に伝えています。



もくじ

路線図	4・5
加越線を走った車両たち	6・7
加越線をめぐる4人の先人	8
加越線と文学	9
加越線と産業	10
加越線と観光	11
加越線・最終営業日の風景	12・13
今に生きる加越線	14・15
城端線と加越線	16
加越線のあゆみ	17
もっと詳しく知りたい方へ	18

●おまけ 加越線キハ125 ペーパークラフト …… 裏面



あの頃
加越線が
走っていた



但田長夫さん
(元車掌・駅員/
高岡市在住)

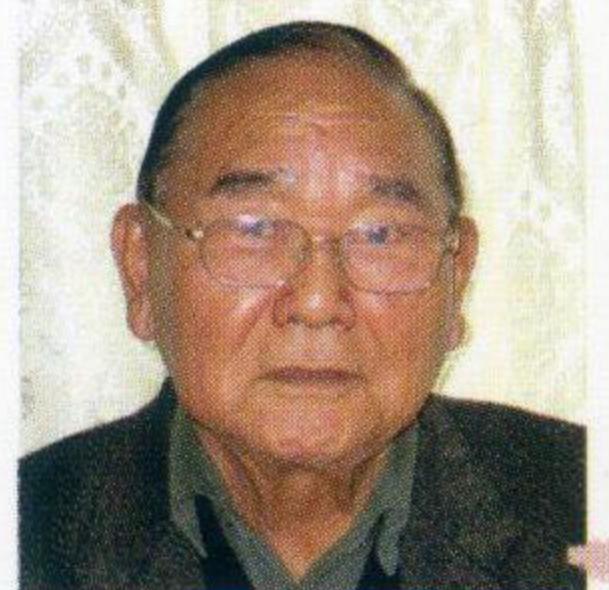
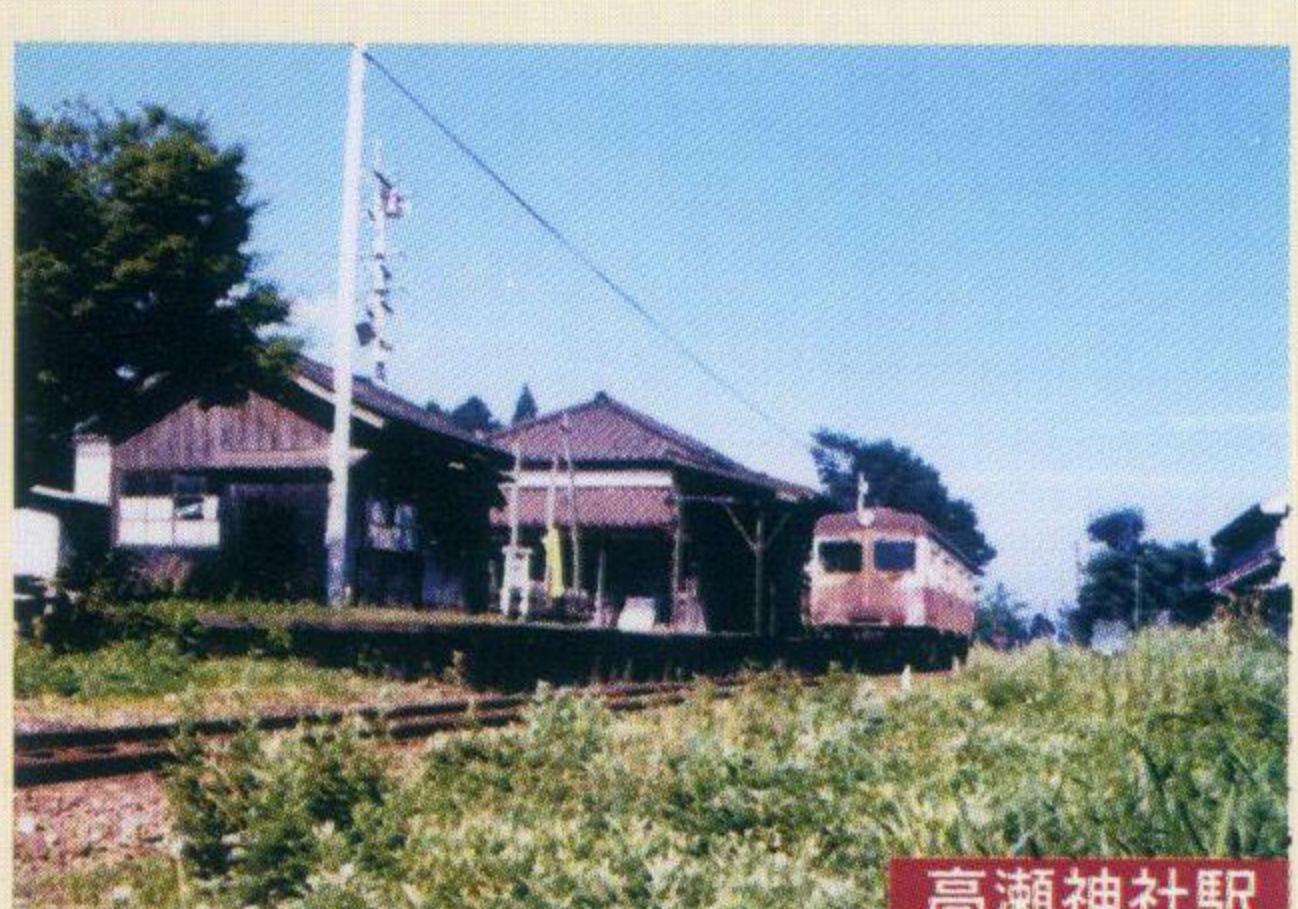
東山見停車場ができた頃、設置予定地が幸い砂利混じりの地面だったため、隣接地の土砂を盛りあげてホームを築いたもので、土を掘った跡地には雨水が溜まり、子どもたちは水浴びをして遊んでいました。また駅員の奥さんからの愛妻弁当を預かり、汽車に乗せて運んだこともあります。苦い思い出といえば、20歳の頃、青島町駅で汽車に乗り遅れた際、自転車で福野駅まで追いかけて、なんとか間に合ったということもあります。それほどのんびりと走っていた鉄道でした。



田中一弘さん
(砺波市庄川町青島在住)

父が加越線の運転手でした。加越線の車両を使用していた鹿島鉄道が廃線になると新聞記事で知りました。父が亡くなり一年も経っておらず、走っている加越線の車両が見たくて遠くまで出かけました。走る姿は見られなかつたけれど、撮影した車両の写真を今も自宅に飾っています。加越線で仕事をしていた父についてあまり知らず、もっと父に話を聞きたかったなど悔やんでいます。早起きして庄川町駅の大きな観光案内板の照明に集まったカブトムシを捕まえた子どもの頃が思い出されます。

路線図



柘元 弘さん
(元車掌・駅員/
小矢部市道坪野在住)

終戦直後に入社し、津沢駅で勤務をスタートして以来、廃線時まで加越線に従事しました。この頃は燃料不足のため、午前・午後それぞれ一往復の運行ということもあります。兵隊さんを見送りに津沢駅から石動駅へ向かう家族の方々が多数乗車されました。

また「38豪雪」の際、井波駅に勤務していましたが、自宅から半日かけて線路伝いに井波まで通勤しました。ちょうど母の葬式と重なり、約半月間、大雪に泣かされたことを思い出します。



岩倉寿一さん
(元保線区員/
南砺市高瀬在住)

昭和37年の春、加越能鉄道に入社しました。その翌年、「三八豪雪」があり、40日間鉄道運行がストップしました。地元の方に除雪を依頼し、みなさんの協力を得て開通を目指しました。私が住む高瀬や井波付近は風が強い地域ですが、始発列車が出る前に家を出て、線路を歩いて庄川町駅まで向かい、木片や障害物を取り除くこともあります。

また高瀬神社の初詣の際は、踏切番を担当しました。汽車が着くたびに、多くの参拝客が神社へ向かう列が続いた光景を思い出します。



梅基 勲さん
(元運転士/
南砺市苗島在住)

昭和34年、加越能鉄道に入社し、廃線直後に退社するまで運転士をしました。2年目から運転に従事しましたが、10年後に無事故運転者として表彰状をいただきました。

退社から40年経ちましたが、今もジョギングで福野から四日町まで走ることがあります。運転していた当時を懐かしく思い起こします。四日町から石動へ進むと渋江川の鉄橋がありますが、増水して鉄橋ギリギリまで水に浸かったことがあります。その時は鉄橋の手前で停車し、水が引くのを待っていたこともあります。



盛田浩司さん
(富山市在住/
南砺市宗守出身)

今は亡き父と一緒に、子どもの頃、鉄道というものが初めて乗ったのが加越線でした。嬉しくてたまらず、窓から外を眺めていた記憶が鮮明に蘇ります。父が石動に用事で出掛けたことがあります、連れて行ってくれました。乗りたいとせがんだのでしょうかね。どうしたいきさつで、連れてってくれたのかは思い出せません。今となっては、父に聞くことは叶いませんが、良い思い出のひとつです。

「加越線よ、良い思い出をありがとうございました！」